みえアカデミックセミナー２００５「心豊かな教育講座」

「人生に文学は必要か」

三重県生涯学習センター
平成１７年７月１３日講演概要
一般科目　　石谷春樹

１．問題提起

私たちの人生にとって文学は必要なのだろうか。文学を教える立場として、この命題は常に私の中にあり問い続けてきた。そうすることで、より良い授業を目指してきたつもりである。特に専門的な教育を学ぶ高等専門学校にとって、この問いは大きな問題の一つである。そこで、今回の講演は文学を学ぶ意義についての私見を述べたものである。

２．読書の特性

あいしてるって　どういうかんじ？
ならんですわって　うっとりみつめ
あくびもくしゃみも　すてきにみえて
ぺろっとなめたく　なっちゃうかんじ

あいしてるって　どういうかんじ？
みせびらかして　やりたいけれど
だれにもさわって　ほしくなくって
どこかへしまって　おきたいかんじ

あいしてるって　どういうかんじ？
いちばんだいじな　ぷらもをあげて
つぎにだいじな　きってもあげて
おまけにまんがも　つけたいかんじ

谷川俊太郎の「あいしてる」という詩である。この詩を読んでどのようなことを感じるであろうか。世の中には理論では説明できないものがある。人間の感情もそのひとつであり、好きな人ができた時「なぜ好きなのか。」と問われても相手に納得できるように説明するのは難しい。しかし、この詩を読んでも分かるように、理論では説明できない人間の心を作者は表現することができる。そして、作品に触れることで、「自分ではどうだろうか。」と問いかけている。自分という視点に立って共感できれば、そこに自ずと感動が得られるのである。読書をするという行為は、他人の文章を読みながらも自分自身と向き合うことである。即ち自分自身を見つめずにはいられないのが読書の特性である。

３．学問上の区分

学問的に〈実学〉、〈虚学〉と２つに分けることができる。〈実学〉は実際の役に立つ学問、生活を豊かにする学問であり、〈虚学〉はそれに対する言葉である。文字のうえから言えば、実りある学問と書く〈実学〉に対して、〈虚学〉は虚（うそ）の学問と書くのである。では「文学」はどちらに入るかといえば、哲学などと同じように、〈虚学〉に分類される。勤務校である鈴鹿高専は、まさしく〈実学〉を志すエンジニアを育てているだけに、〈虚学〉である「文学」の必要性をいかに学生に教えていくかということは重要な課題である。今のような不景気の世の中では、より〈実学〉が尊重される。腹を減って困った時は、誰もが本を読むよりもパンを食べるのは当然のことである。「文学」の必要性を考えるためには、〈実学〉と〈虚学〉の役割をどのように考えればよいのだろうか。人間には「昼の思考」と「夜の思考」があると思う。「昼の思考」とは科学や政治などを考え、「夜の思考」とは文学や芸術などを考えるのではないか。そして両者のバランスがうまくとれないと人類は滅亡してしまうだろう。夜の思考」は「昼の思考」とは全く違い、例えば、夜、寝つかれぬままに布団の中で考えると、昼間は見えなかった人間の心が見えてくる。そして、人類とは何か、歴史とは、人生とは、といった昼間はたらいている時には思いもしないような思考が浮かんできたりするのではないか。このように、

「夜の思考」には思いつめたところがあり、実生活にはあまり役に立たないものであるが、人間を深く知るうえでは意味のあるものだと思う。この「昼の思考」と「夜の思考」が〈実学〉と〈虚学〉に当てはまるのではないかと考えるのである。

〈実学〉は目の前に存在するものを大切にするわけであるが、〈実学〉は what、how、という点を大切にしている。つまり「何を、どのように」の意味はもつが、why の「なぜ」という意味はもちあわせていない。しかし、私たちは生きていくうえで、この「なぜ」と言う問いかけが大切であり、それが生きがいにもつながっている。即ち、〈虚学〉の「なぜ」という疑問のうえに立って、初めて〈実学〉の「何を、どのように」という問題が生まれるのであり、〈虚学〉の発想がなければ、〈実学〉の意義も生まれてこないと考えられる。また、〈実学〉が人間の欲望の中で、日々新しいものを追いかけなければならない性質をもっているのならば、〈虚学〉は逆に人間であるという原点に立ち返って、日々の進歩の中で、変わってはいけないもの、換言すれば、人間として守るべきものを大切にしているのかもしれない。そのように考えると、常に人間という立場に立ち返って、〈実学〉を問い正すのも〈虚学〉の役割ではないかと思うのである。〈虚学〉は〈実学〉に対して生まれた言葉ではあるが、反対に位置するのではなく〈虚学〉の存在がなければ、〈実学〉は存在しない。即ち、人間としての意義を学ぶのが〈虚学〉であり、〈実学〉を学ぶ喜びは、〈虚学〉を通じて感じると考えるのである。

４．文学とは何か

（１）「文学とは表現されたもの」

〈虚学〉に属する「文学」の本質に迫りたいと思う。文学は、言葉で表現されたものである。そこで、表現という行為を考えてみると、人間は自己表現することで自分の意志を表現し相手に理解してもらう。表現することで世の中は成立しているのである。私たちは言葉で表現することでしか、日常生活で自分を分かってもらうことはできない。例えば、遠足に行った幼稚園児がお母さんに感想を聞かれると、「すっごい」という言葉を使って自分の感動をお母さんに伝える。人は、何かに触れれば心が動く。つまり感動するのである。そして、その感動を人に伝えたくなる。この伝えたいという気持ちは人間の本能であり、たとえ幼稚園児でも感動を伝え自分の気持ちを分かってほしいのである。感動を、音で表すのが音楽家であり、絵で表現するのが画家、そして言葉で表現する人が小説家、中でも詩が詩人、歌が歌人、といえるのかもしれない。つまり、表現されたものは作者の感動の具体化されたものである。例外もあるが、文学とは決して読者を喜ばそうと意識して書かれたのではない。文学は作者の心の叫び声であり、作者がすべてをさらけ出すからこそ、読者はその作品を読み感動するのである。即ち、表現されたものから作者が何に感動をしたのか、何が作者の心の叫びか考えること。これが文学である。

（２）文学は〈生産〉活動

表現されたものから、私たちはその人は何を伝えたかったのか考える。つまり人とコミュニケーションをとることで、世の中は成立している。文学も同様であり、作者の表現したものから、何を表現したかったのかを考えることが文学である。つまり、読書をするという行為は、日常生活における人と人とのコミュニケーションに似ている。

本を読む場合と会話との大きな違いは、話をする場合は目の前に対象があり、話をする人は相手の年齢や性別などに応じて話ができる。つまり、聞き手に合わせて、もしくは聞き手の表情を見ながら話ができるのである。話す場合と違い読書は、読み手が作者に情報を与えられない以上、読者はその分、作者を理解するために努力をしなければならない。受身的に作品を読んでいては、作品の意味を正確に理解できないのである。

文学を同じ表現された映像、音楽と比べても相違は明らかである。感動を得ることができる点では同じである。例えば映像は見るだけで、感動を得ることができる。音楽も、聴いているだけで感動できるし、受動的な要素が非常に強いといえる。

しかし、文学は能動的な要素を多くもつ。自分の手で作品を読み、自分の中で作品世界を再構築しなければならない。つまり、自分で考え消化しないといけないのが、文学である。換言すれば、文学とは〈消費〉活動ではなく、〈生産〉活動である。共感するばかりではなく、時には作者との意見の違いから、〈葛藤〉を覚えながら読み進めていく場合もある。このことを、読むという営みの中で私たちは求めていかなければならないのである。即ち、文学作品を読むことは、作品と向き合い、手探りで進みながら、その世界を味わっていく行為である。表現を手がかりとして情報を読み取り、作品世界を自分の中に作り上げてゆくことなのである。

５．作品読解

よく学生に、「自分で食べなければ本当のパンの味は分からない。」と言っている。ステーキを食べている人を見ているだけでは味は分からないし、自分の栄養にはならない。自分で食べ、よく噛むことで本当の味が分かり栄養になる。文学も自分で読み味わうことが大切である。作品の表面的なものを読むのではなく、作品を丁寧に読み解くということが大切だということを実感してほしい。

（１）川端康成「バッタと鈴虫」

ノーベル文学賞を受賞した川端康成の「掌の小説」の中から「バッタと鈴虫」という作品を考察してみたい。この作品は「大人の世界」と「子供の世界」の二つの世界が描かれている。子供の世界で不二夫がキヨ子に鈴虫をバッタだと言って渡し、キヨ子の喜びを大きくするという大人顔負けの駆け引きが描かれている。その場面の後に、子供たちは知らない光の戯れの場面が大人の視点から次のように書かれている。

> 女の子の胸の上に映っている緑色の微かな光は「不二夫」とはっきり読めるではないか。女の子が持ち上げた虫籠の横に掲げた男の子の提燈の明り模様は、提燈が女の子の白い浴衣に真近なため「不二夫」と男の子の名を切り抜いた所へ緑の色を貼った形と色そのままに女の子の胸に映っているのである。女の子の提燈はと見ると、左の手首に懸けたままたらりと垂れているので「不二夫」ほど明らかではないが、男の子の腰のあたりに揺れている紅い光を読もうなら「キヨ子」と読める。この緑と紅の光の戯れを―戯れであろうか―不二夫もキヨ子も知らない。

この作品は虫取りをする子供たちの様子が色彩感豊かに描かれている。その色彩感の豊かさは細部にみられ、特別な意味をもっていると考えられる。この場面において不二夫の持つ提燈がキヨ子に映るのであるが、キヨ子の「胸の上」に「緑色」で映り「はっきり読める」のである。一方、キヨ子の持つ提燈が不二夫に映るのであるが、不二夫の「腰のあたりに揺れている紅い光」であり、「『不二夫』ほど明らかではない」のである。このような映っている場所、状態、色彩から次のような分析が可能である。映っている場所からキヨ子にとっての「胸」、不二夫にとっての「腰」は、お互いの性を象徴している。また、状態はお互いの好意を表している。不二夫からキヨ子への気持ちは鈴虫をやったことから「はっきり」しており、キヨ子からの気持ちは「明らかではない」のである。さらに色彩の「紅い」は、人生における運命の「紅い」糸を意味するのではないだろうか。

「バッタと鈴虫」を読み解いていくと、このような色彩豊かな点のほか、作品には主人公の女性に対する特別な感情が描かれている。それは「不二夫少年よ。」という大人の世界からのメッセージの形で末尾に描かれている。作品のもつこれら二つの特徴はどのような意味があるのだろうか。執筆前後の川端の動向を見てみたいと思う。川端は、大正十年十月八日岐阜にいた伊藤初代を訪ね結婚の約束をするが、一ヶ月後、不可解な別れの手紙を受け取る。これが所謂、川端の「非常事件」である。そして、大正十一年八月十七日「バッタと鈴虫」、「男と女と荷車」などを執筆する。「男と女と荷車」は大正十二年四月に発表されるが、「バッタと鈴虫」は遅れて大正十三年十月に発表される。また、「バッタと鈴虫」は大正十五年六

月に上梓された『感情装飾』に再掲されるが、改稿の後が見られる。一例を挙げると「しやがんでいる。」が「しやがんでいるのである。」などのように説明的になっている。執筆から発表まで時間がかかっていることは、「非常事件」における失恋の傷が癒えるまでの時間だったのではないか。さらに改稿の問題は、時間が経過することで冷静に見つめた結果、説明的になったと言えるのではないだろうか。運命の「紅い」糸に関しては、「篝火」などの作品に「紅い火に運命」を見ていることが根拠に挙げられる。また、女性に対する特別な感情をこの作品に描いたのは、鈴虫が共食いすること、さらに婚約を申し込みに行った際、岐阜にある「名和昆虫博物館」を訪れていることなどからも、非常事件の影響が「バッタと鈴虫」に描かれていることは明らかである。即ち、これらのことから、文学とは川端における「バッタと鈴虫」のように、作者の人生と大きく結びついていると考えられるのである。

（２）芥川龍之介「大導寺信輔の半生」

芥川龍之介は新原敏三、フクの間に生まれるが、実母フクが、龍之介の生後七ヶ月で発狂し、フクの実家である芥川家に預けられる。そして夏目漱石に「鼻」が賞賛され文壇デビューを果たし、「今昔物語集」などの古典を素材にして創作活動をする。その頃文壇では「私小説」が注目され、古典を素材にする作品でなく私小説を書くように文壇は芥川にも迫る。しかし、芥川にとって容易に私小説を執筆することはできない。それは、発狂におびえ、実母フク発狂の事実を隠蔽することで創作活動を続けてきた芥川にとって、私小説を書くことは、母の発狂について書くことになるからである。

「澄江堂雑記」十六、告白（『随筆』大正一二・一一）の中で「僕も告白をせぬ訳ではない。僕の小説は多少にもせよ、僕の体験の告白である。けれども諸君は承知しない。諸君の僕に勧めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上に起つた事件を臆面もなしに書けと云ふのである。（中略）誰が御苦労にも恥じ入りたいことを告白小説に作るものか。」と述べており、芥川の心情を理解することができる。

「大導寺信輔の半生」における「牛乳」の章の虚構箇所を指摘し作品を考察すると、作品中には「信輔は全然母の乳を吸つたことのない少年だつた。」、「元来体の弱かつた母は一粒種の彼を産んだ後さへ、一滴の乳も与えなかつた。」とあり、実母発狂のことは隠蔽されている。しかも、養子先で伯母フキに育てられていたという事実が反映して、その養子先に合わし一人子になっている。また、貧困であるいう虚構化が加えられ、生まれた時から牛乳を飲んで育てられ、その結果、主人公は牛乳を憎んでいるのである。このように、自らのことを語ろうとした〈告白〉は虚構化されているのである。ここで重要なのは作品中には牛乳を憎みながらも、決して母を憎んでいることは書かれていないことである。

さらに、この章の末尾には次のようにある。

> 当時叔父が経営してゐた牧場へ行つたことを覚えてゐる。殊にやつと柵の上へ制服の胸をのしかけたまゝ、目の前へ歩み寄つた白牛に干し草をやつたことを覚えてゐる。牛は彼の顔を見上げながら、静かに干し草へ鼻を出した。彼はその顔を眺めた時、ふとこの牛の瞳の中に何にか人間に近いものを感じた。空想？――或は空想かも知れない。が、彼の記憶の中には未だに大きい白牛が一頭、花を盛つた杏の枝の下に柵によつた彼を見上げてゐる。しみじみと、懐しさうに。……

牛乳を飲んで育ったのは信輔である。しかし、信輔が白牛の方へ引き寄せられる形でなく、白牛から「歩み寄つた」という方向性は重要である。また、それだけでなく「見上げてゐる」と白牛の行動に主眼がおかれ、白牛に「人間に近いものを感じ」ている。信輔が「牛乳」で育ったから実母の姿を「白牛」に重ねているのではなく、信輔は白牛から与えてもらった牛乳で育ったと考えているのではないだろうか。さらに、白牛が「懐かしさうに」と感じている。と受け取る信輔の心情は、白牛としてではなく、完全に人間としてみているのである。だから、母を憎むというより、母

をいとおしんでいると考えられ、生きながらにしての母の不在は、母のせいではなく、いわば運命であり、虚構化することで、実母への思いを語っているのである。「侏儒の言葉」又虚偽（『文藝春秋』大正一四・四）の「わたしは不幸にも知つている。時には嘘に依る外は語られぬ。真実もあることを」という言葉によって芥川の内面を知ることができる。即ち、文学とは芥川のように作者の内面の苦悩、心の叫び声が描かれたものである。

（３）金子光晴「落下傘」

金子光晴の「落下傘」（『中央公論』昭和一三・六）は反戦詩である。作者の自注（『現代詩入門』青木新書三　昭和二九）には次のようにある。

> この詩が反戦詩であるにもかかわらず、当局の目をぬけて、公器に発表されたのは、詩の表面のイミが、うら返しにしてあるからである。（中略）こんな詩を、解釈どおりにあからさまに書いたら、決して発表される筈はなかった。それどころか、首をちょん切られて、いまどき僕が、こんな解説など書いていられたものではない。（中略）ただ一つ、どこかに鍵をつけておいて、その鍵のあり場所のわかる人たちにだけ、はっきりわかるようにしておかなければならない。」

表面的には落下傘に揺られている不安感が書かれているように読み取ることができる。しかし、「落下傘」という表題だけでも「落下傘部隊」「傘下」などの戦争用語も連想できる。
そこで自注の「鍵のあり場所」を考察してみたい。「なんというパラソルのたよりなさだ。」の「パラソル」については、落下傘を例えたものであるが、落下傘を「パラシュート」と考えれば、両者は共通する「パラ」（para）という接頭語をもつ。この接頭語は「防御」という意味をもっており、「パラソル」が反戦詩の鍵になっていると考えることができるのである。

また、末尾には次のようにある。

> 「神さま。どうぞ。まちがひなく、ふるさとの楽土につきますやうに。風のまにまに、海上にふきながされてゆきませんやうに。足のしたが、刹那にかききえる夢であつたりしませんやうに。万一、地球の引力にそつぽむかれて、落ちても、落ちても、着くところがないやうな、悲しいことになりませんやうに。」

この祈りの文末は「せんやうに」と表現されている。肯定的な祈り方でなくこのような否定的な表現方法は、「せめて―することがないような。」という最悪のことを恐れる作者の祈りであり、それだけそのようなことが起こる可能性が大きいことを意味しているのである

このように、作者はその時代を生きる人間の一人として、社会を見つめ、社会を批判する力をもっているのである。これも文学が作者の心の叫び声としての力をもつからであり、文学にしかもてない力といえるだろう。

（４）書かれた物はすべて文学

最後に文学作品以外を見ておきたいと思う。「天声人語」（平成七年十一月二十九日）から一部引用しておきたい。

> 〈僕は生きていくのがいやになったので死なせてください〉。（中略）〈お父さん。自転車買ってくれて本当にありがとうございました〉とある。誕生日のプレゼントだった。僕のまだきれるコート、バスケットボード。一つひとつ品物の名を挙げて、だれだれに贈ってほしい、と指定した。自殺した五輪マラソン選手、円谷幸吉さんの遺書を思い出す。彼は、食べ物の名を、遺書に並べた。〈父上様、母上様、とろゝ美味しうございました。干し柿、もちも美味しうございました〉と。死んでいった人は、物に託して、どんな思いを伝えたかったのか。（中略）お父さんのことばは、胸を打つ。「とにかく手のかからない息子だった。唯一、手をかけたのが死んだ息子を（首をつった）バスケットのゴールから下ろす時でした。」

この新聞記事には、いじめの事実と遺族の心の痛みが記者の手により表現されている。いじめへの怒りと息子をなくした悲しみの深さを読み取ることができる。そして、作者の人間としての「な

ぜ」という問題提起もある。この問題提起がこの文章の書かれた大きな目的であり、今後の私たちの課題である。文学は作家の書いたものだけではなく、人間という原点から発信されたメッセージも含まれている。自分の心をさらけだし世に問う意味もある。人間から発せられた人間のためのメッセージ。そのすべてが文学と呼べるものなのである。即ち、誰でもが作者であり、手紙、日記に至るまで文学であり、書いたものはすべて文学なのである。

６．まとめ

現在の小学校一年生の時間割を知っているだろうか。算数の三時間に対して、国語の時間は六時間である。その他、読書、書写まで入れると八時間が国語関係の時間である。また、道徳も国語教育に通じると考えれば九時間になる。国語はいろいろな教科の基本であることを文部科学省は多い理由に挙げている。国語＝文学とは言えないが、国語における文学作品の比重は非常に大きく文学の必要性にも通じていると言えるのである。

芥川の「地獄変」は、主人公良秀が自分の娘を焼かれ、その苦しんでいる姿を絵に描くことで作品を完成させる。そして、芥川は「人生は一行のボードレールにも若かない。」（「或阿呆の一生」『改造』昭和二・一〇）と言った。ボードレールはフランスの詩人である。「若かない」は「及ばない」の意味であり、芸術至上主義の芥川らしい言葉であるが、作家の芸術に対する想いを知ることができるのである。

以上、文学についての私見を述べてきたわけであるが、作品を一字一句丁寧に読み解き、その作品から現れた「なぜ」という疑問に作者を照らし合わせること。そして、作者の心の叫び声を聞くことが文学なのである。文学とは作者の感情が表現されたものであり、作者は作品によって自らの内面の苦悩を語り、また場合によっては社会への批判も表現しているのである。そして、読者はそれに触れることで、共感し、またある時は反発する。その結果、人生をいかに生きるべきかを学ぶのである。

このように文学とは人生が表現されたものであると思うのである。そこには必ず作者の苦悩が表現されている。また、生きることは考えることであり、生きる以上苦悩のない人生などあるはずはないのである。そして、特に文学は歴史や政治と違い、強者の声を聞くためや立派な人の声を聞くために存在しているのではなく、どちらかと言えば、弱者の声を聞くためにも存在していると思う。だからこそ、私たちは生きていくうえで文学を必要としているのだと思うのである。

「人生に文学は必要か」という問いは、人間の根底に関わることであり、私たちの人生そのものが文学であると言っても過言ではない。即ち、文学が必要かという問いに対する結論は、「あなたは人間であることをやめますか。」あるいは「生きることをやめますか。」と聞いているに等しいと考えられるのではないだろうか。よって、このように人間を見つめるうえで、基盤となる文学を通じてこれからも「人の気持ちを考える」ことの大切さを学生に教えていきたいと思っているのである。